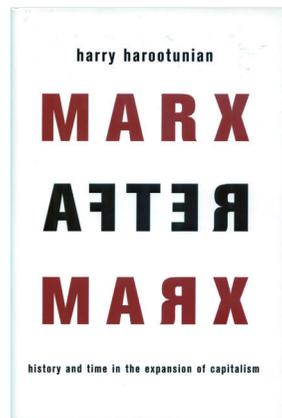


ハリー・ハルトゥーニアン

『マルクス・アフター・マルクス——資本主義の拡張における歴史と時間』

Harry Harootunian, *Marx After Marx: History and Time in the Expansion of Capitalism*

平野克弥



Columbia University Press, 2015

グローバルヒストリーと史的唯物論のあらたな射程

ハルトゥーニアンの新著、『マルクス・アフター・マルクス』は、ヘーゲルが構想した普遍的歴史あるいは普遍史 (Universal History) にかわつてマルクスが提示したグローバルヒストリーの射程の広さと深さを再評価し、その分析的視点を救い出すことを目的としている。それは同時に、欧米諸国で行われてきたマルクス主義研究がいわゆる「西洋マルクス主義」——ペリー・アンダーソン (Perry Anderson) が Western Marxism と呼んだそれ——を特権化してきたこと、つまりマルクスが『資本論第一巻』の第一編で展開する商品形態とその物神崇拜 (fetishism) を資本主義社会の普遍的な支配形態だと断定してきたことへの異議申し立てでもある。西洋マルクス主義は、ジェルジュ・ルカーチが『歴史と階級意識』の

なかでマルクスのいう商品形態を資本主義社会特有の物象化現象 (reification) としてとらえ、それが近代の社会関係を質から量へ、具体性から抽象性へ、使用価値から交換価値へと従属させ、人間の生をその根元から均質的で無機質なものに作り変えてしまうという主張に始まり、その後アドルノやホルクハイマーに代表されるフランクフルト学派の近代および啓蒙主義批判に引き継がれていった。ハルトゥーニアンは、この社会関係の商品化という均質化・非人間化過程 (疎外論) にたいしてルイ・アルチュセールやサミール・アミンがマルクス、レーニン、毛沢東に倣つて理論化した「不均等発展」 (uneven development) という概念を援用しながら、資本主義は自己増殖のために世界を均質化するのではなく、異種混合的な差異 (difference) を抱え込み、またジェンダー、人種、

階級のような差異化を必要とすると主張する。

この論拠として、ハルトゥーニアンは、マルクスが非資本主義社会——封建的農村社会や先住民社会——が資本主義的生産様式に飲み込まれていく過程を分析するために使った概念、形式的包摂と実質的包摂に焦点を当てる。実質的包摂は、西洋マルクス主義が主張したように、資本主義社会が商品形態による社会の物象化現象を貫徹する事態を指す一方で、形式的包摂は、それが過去の様々な残余、遺制を抱え込んでいるがゆえに、完全な均質的世界を実現し得ない状態を意味している。ハルトゥーニアンにとって重要な分析的概念は、形式的包摂である。本書は、この概念の可能性をマルクスから出発し、ローザ・ルクセンブルク、アントニオ・グラムシ、ホセ・カルロス・マリアテギ、そして、山田盛太郎や宇野弘蔵を読み解くことで系譜学的に分節化していく。この形式的包摂の読解作業は、世界を覆い尽くそうとする資本主義が、歴史的、文化的、社会的に異質な共同体に遭遇し、それらの異種性をどのように自己増殖のシステムに取り込んでいくのか、その過程でどのような社会的変容・編成を引き起こすのか、またどのように自らの不完全性や矛盾を乗り越えようとするのかという問いの探求である。したがって、本のタイトルである『マルクス・アフター・マルクス』は、マルクス主義解釈を支配してきた商品形態の分析的視点（実質的包摂）に代わる新たな視点——形

式的包摂が提示する歴史的思考——を意味しているのである。

本書評では本書の詳細な検討は紙面上難しいので、ハルトゥーニアンの形式的包摂の解釈をとおして見えてくる新たなグローバルヒストリーの可能性を二つの点に絞って論じてみたい。

1. いわゆる封建的遺制（旧社会の残存物）は日本の後進性や近代の歪いびさを示すものではない。これは資本主義の世界的展開が生み出す一般的な形態である。しかし、その内容は、資本と遭遇したタイミングや状況によつて異なる。そこに資本主義と非資本主義社会の遭遇の歴史性、歴史的差異をみてとることができるとし、近代社会形成を複雑な異種混合性（heterogeneity）の生産として理解すべき根拠を見いだせる。

2. ハルトゥーニアンがはつきりと論じていることではないが、彼のルクセンブルクとグラムシ、マリアテギの読解から見いだされる論点であり、「グローバル・サウス」と呼ばれてきた旧植民地、先住民、奴隷制度の研究から導き出されてきたあらたな問題系でもある。つまり、黒人史研究、南米植民地史、北米およびオーストラリア先住民史、奴隷貿易史、パレスチナ占領の研究などで盛んに議論され始めている人種化と資本主義の関係性をめぐる問題系である。

第一の点から始めよう。本書は、世界を覆い尽くそうとする資本主義が非近代的な生産様式、社会関係、慣習、時間性と遭遇した時に、それらをどのように包摂するのかという問いを立て、次のように主張する。資本主義の増殖と拡張は、非近代的な社会組織や共同体を完全に破壊したうえで包摂するのではなく、利用できる「伝統的な」要素は積極的に保存し、横領し、作り変えることを目指す。それゆえに、この包摂の過程は、資本がどのような歴史的・社会的・経済的・イデオロギー的差異と遭遇するのかという問題に関わっている。それは、商品形態によって世界が均質化される過程でも、普遍的な歴史的法則に支配されているわけでもなく、またヘーゲルのいう国民精神が自己実現のために自由を獲得していく旅路でもない。それどころか、包摂の過程は、過去と現在の融合が生み出す重層的な時間性と異種混合性に満ち、それだからこそ多様に生きられた時間＝歴史を生み出してきたとハルトゥーニアンは主張する (p.262)。換言すれば、資本は、自己の増殖と拡張のために、極めて具体的に異質な歴史的状況と遭遇し、それを包摂することで非均質的で不均等な世界を生み出してきたのである。

こうして、近代世界は資本の運動を通して、ローカルな世界が同時にグローバルなものとなり、グローバルな問題はローカルな世界で顕在化するような状況をつくり出した。この観点に立つて、

ハルトゥーニアンは、「マルクスがヘーゲルの普遍的な歴史に変わって、真正正銘の世界史の展望を提示した時、「特定の場所に根ざした存在 (local being)」を「普遍的な存在 (universal being)」へと転換すること、つまりそれは特殊なものを普遍化し、普遍的なもの特定化することの重要性を強調していたのだ」と主張する (p.263)。彼に従えば、この転換こそ、資本の運動が生み出したグローバルヒストリーの可能性である。たとえば、後進性の象徴のように議論されてきた封建的遺制は、そのようなローカルとグローバルの弁証法が生み出した世界的な現象にすぎず、ローカルな歴史状況によって発現形態は違ってくるものの、資本主義の発祥の地とされるヨーロッパですら抱え込んできた問題である。『マルクス・アフター・マルクス』は、この文脈で、山田盛太郎を評価しつつも、日本の封建的遺制を特殊な「型」として非歴史的に理論化したことを批判する一方、農業問題を論じながら「資本主義は、その発生、発展、確立に障害とならない限り、旧社会の残存物をも許容するのである。そればかりではない。時には逆に、かかる残存物の温存をさえ求めることになる」と論じた宇野弘蔵を、形式的包摂論を深化させた理論家として位置付けている (p.192)。

第二の点に移ろう。当然ながら、ハルトゥーニアンのグローバルヒストリーは、資本主義が非資本主義世界に対して破壊的な暴力を行使し、不均等な関係性が最も深刻なカタチで現れる状況を

視野に入れている。ローザ・ルクセンブルクが『資本蓄積論』のなかで展開した「自然経済の制服」の議論を膨らませながら、資本主義が商品化されえない社会関係に向ける容赦ない暴力を形式的包摂の一形態として論じている。自然経済の制服とは、いわゆる自然資源獲得のために先住民から土地を収奪し、かれらの労働力を徹底的に搾取する植民地的制服と強奪を意味している。ハルトゥーニアンによれば、ルクセンブルグは、資本が非資本主義的

社会とどのように出会うのかという問いに注目することで、「資本がヨーロッパ以外の社会を統合しようとする時、自己の発展にとって障害であるものを根絶させるような政策を必ず伴っている」事実を深く認知していた(p.100)。ルクセンブルクに依拠しながら、封建社会が資本主義社会に移行する際、貧農のプロレタリアート化——生産手段の収奪と労働力の商品化——を促進したのとは対照的に、自然経済の制服は先住民をプロレタリアート化するとはなかつたとハルトゥーニアンは主張する。つまり、生活手段や生産手段の収奪をとおして先住民を商品交換の流れの中に統合し、伝統的な生産形態を商品生産へと変質させることはなかつたのである。自然経済の制服はその生産形態の根絶を目指す戦いなのであり、それゆえに、その形態に依拠してきた人々は、幾度となくジェノサイドを経験してきたのだと。確かに、資本主義と出会うことで、多くの非資本主義社会は壊滅させられてきた。

いわゆる原始的蓄積における経済的強制を指してマルクスが「残虐な力」(brute force)とよんだ暴力的な収奪過程、またはパトリック・ウルフが開拓植民地主義 (settler colonialism) を指して「排除の論理」とよんだ殺戮的な移住・占領の過程は、北米やオーストラリアを始め、世界各地で近代社会の萌芽期に幾度となく繰り返されてきた現象である。

ハルトゥーニアンの自然経済の制服をめぐる議論は、マルクス同様その破壊的暴力性の指摘で止まるのだが、彼の形式的包摂の解釈は、この問題系をさらに深化させる可能性を孕んでいる。近年、いわゆる原始的蓄積の再理論化が進んでいるが、そのなかで指摘されている問題、つまり、資本主義の形成期に限らず、その再生産過程においてまったく無用でありまた障害とさえ見なされてきた労働形態(狩猟、採取、コモンスなど)をどのように捉え直すのかという問いを考えるうえで、ハルトゥーニアンの形式的包摂の議論は重要な意味をもつだろう。封建的土地所有制が資本主義制度に包摂されていく過程や、賃金労働の社会関係が資本主義における労働形態を変質させていく過程、また入会地(いりあいち)が収奪され、資本主義的土地所有制(私有財産制)に統合されていく過程などは、マルクスを始め、かれの影響下にあつた唯物論的歴史研究がつぶさに分析してきたことである。日本における封建的遺制をめぐる議論もまた、このような問題意識を中心に展開してきたし、上述

した通り、ハルトゥーニアンもこの文脈のなかでマリアテギ、山田盛太郎、宇野弘蔵の理論を考察している。

しかし、いわゆる封建制や近代国民国家の外に置かれてきた先住民、移民、奴隷、障害者または難民がどのように包摂・排除されてきたのか、彼ら・彼女らの収奪が資本主義社会の創出と再生産とどのような構造的つながりを持つてきたのかという問いは、マルクス主義歴史学のなかでも正面から取り上げられることはなかった。「国民国家史」の枠から排除されてきたこれらの人々を資本主義形成とその持続の可能性の条件として捉え直すことは、近代社会の重層性を明らかにするばかりでなく、その暴力の多面性、多重性を理解することにつながるし、資本主義制度そのものの理解を深めることになるだろう。たとえば、人種主義に起因する虐殺、ヘイトクライム、襲撃、収奪、搾取を、資本が非資本主義的世界と遭遇するときに生み出す構造的な問題として捉え直したときに、原始的蓄積論や形式的包摂論はどのように見直されるべきだろうか。

いずれにしろ、『マルクス・アフター・マルクス』は、多くの刺激に満ちた視点を提供している。本書は、近年新しいグローバルヒストリーが盛んに議論されている中、マルクスが構想した世界史の可能性に立ち返り、資本主義がもたらした近代という世界の姿を再考察するうえで重要な著作になるだろう。